

消滅危機言語，宮古口のエスノグラフィー —学校と集落のフィールドワーク調査の記録—

藤田ラウンド幸世（国際基督教大学）

1. はじめに

21 世紀の日本社会では，1) 先住民言語のアイヌ語と琉球王国時代からの琉球諸語，2) 19 世紀から日本に移住をしたオールドカマーの母語である韓国語や中国語，3) 1990 年改定入国管理法に伴い移住した，日系人を中心としたニューカマーの母語であるポルトガル語やスペイン語，4) 非漢字圏のニューカマー移民の母語であるフィリピン語やネパール語等，また，5) 書記言語でも音声言語でもない「手話言語」の日本手話など，「日本語」以外の言語も使用されている．日本語は主要言語ではあるが，日本社会には単一言語のみではなく，言語の多様性が存在している (Fujita-Round & Maher, 2017)．

本研究は，ユネスコ (UNESCO 国連教育科学文化機関) に認定された日本国内に存在する 8 言語の消滅危機言語の一つである，宮古語が使用されている宮古島をフィールドとし，消滅危機言語と日本語のバイリンガルの言語使用について調査を行っている．2012 年からフィールドワークを始め，段階を経て宮古島市の中の学校（小学校，中学校）と集落（家族，コミュニティ，学校外での施設）のフィールドワークの対象者を広げた．また，生徒の宮古口（みゃーくふつ）と日本語の二言語使用の調査では，学校現場でアクションリサーチを行った（藤田ラウンド，2015）．本発表では，フィールドワーク調査と中学生への縦断的インタビューの言語データとを組み合わせ，言語のエスノグラフィー (Linguistic Ethnography) としてまとめることを試みる．

2. 宮古口のバイリンガリズム

2. 1 日本国内の消滅危機言語

国際機関としてのユネスコは，世界中の消滅の危機に瀕した言語について，2003 年にユネスコの無形文化財局内に新たに危機言語部門を設置し，そこでまずガイドラインを作成した¹．続けて，2009 年にはユネスコによる世界の危機言語地図をインターネット上で公開した．その地図上には危機言語として日本国内の 8 つの言語が記載されている．危機度別に，1) 極めて深刻：アイヌ語，2) 重大な危機：八重山語・与那国語，3) 危険：八丈語・奄美語・沖縄語・国頭語・宮古語である．ユネスコが認定した日本国内にあるとされた消滅危機言語の 8 言語の内，6 言語は「琉球諸語」である．

¹ UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) "Language Vitality and Endangerment", a document submitted to the International Expert Meeting on UNESCO Programme Safeguarding of Endangered Languages, Paris, 10–12 March 2003 http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Language_vitality_and_endangerment_EN.pdf



図1. ユネスコ「世界の危機言語地図」上の8言語²

「琉球諸語」とは、「琉球語」として一つの言語が話されるわけではなく、琉球には複数の言語があり、その総体を意味する。Shimoji (2010)は、「琉球語」は琉球王国の城があった首里を中心とした首里語を指して「琉球語」と代表させることがあるが、19世紀まで琉球王国として発達をとげた現在の沖縄県・鹿児島県に点在する島々の中で、首里語は「沖縄本島」で話される言語の一つであると指摘する。また、新垣(2013)が言うように、北は奄美諸島から南は与那国までの約1,260メートルに及ぶ海域で話されている「ことば」または「言語」を考えれば、「琉球語」という一つの言語ではなく、「琉球諸語」として複数の言語の総体としたほうが現実的であると考えられる。琉球諸語に関しては、そのことばの位置付けを「言語」とするのか、「(日本語の)方言」とするのか、これまでの歴史的かつ政治的な問題もあり、未だに決着をみていない。本発表では、こうした議論とは別に、宮古島の言語話者の「話しことば」で自らの言語を表す「宮古口(みゃーくふつ)」を宮古語と同義で用いる。

2.2 琉球諸語の衰退と日本の言語政策

琉球諸語が現在のように衰退した原因は、明治期に始まった日本の言語政策、標準語化政策であることは誰もが指摘するところである。(詳しくは藤田ラウンド, 2015 参照)。簡単に述べておくと、明治5年から12年にかけて、琉球王国が廃止され、琉球藩に、さらには沖縄県として位置付けられるようになり、それと同時に日本政府の政策として、琉球の島々は「本土」の言語と文化に強制的に同化させられた。特に学校教育の中で「方言札」に象徴されるような強制的な日本語使用が奨励された(田窪, 2013)。これと同時に、言語使用域の「公的」スペースが日本語に取って代わられたことで、それぞれの地域方言の言語使用域が狭まり、使う機会が減少したともいわれている(ハインリッヒ, 2010)。加えて、1972年の沖縄の本土復帰(沖縄返還)以後、沖縄県の学校教育の教授言語は日本語になり、同時にメディア、雑誌、本、公的文書、公的標識などが日本語の標準語へと切り替わった

² UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger, <http://www.unesco.org/languages-atlas/>

(Fujita-Round & Maher, 2017). 日本での消滅危機言語は、いづれも上記に挙げた明治時代の歴史的経緯、標準語化の言語政策が衰退の一因として関わっていると見えるが、その中で留意をしたい点は、教育現場において日本語への同化が進められたことである。

2. 3 宮古島市と研究調査地の現況

沖縄県宮古島市は、沖縄本島から約 300 km 南西に位置する先島諸島の一部であり、宮古島群島、宮古島、池間島、大神島、来間島、伊良部島、下地島、多良間島、水納島の 8 つの島々から形成されている（青井, 2013）。この 8 つの島のうち、図 2 に示した 1 から 6 までの島々の市町村を 2005 年に合併し、これが現在の宮古島市となった。



図 2. 宮古島諸島³

2014 年において、宮古島市の全人口は 54,290 人であり、そのうち本研究の対象となった久松の集落の人口は 1,084 人で、宮古島市全体の 2% にあたる。集落の史実を書いた松原（2001）によると、近代における久松集落の人口のピークは 1960 年の 3,552 人であったという。また、当時の小学校の児童数は 683 人であったので、2014 年の久松小学校の児童数である 308 人と比較をすると 2 倍の児童が集落に住んでいたことになるが、逆に、小学校に通う子ども達は半世紀で半分に減少したともいえる。

2. 4 宮古口の言語話者

青井(2013)は、宮古語を、宮古ことば、大神ことば、池間ことば、伊良部ことば、多良間ことばと来間島を除く 5 つの島ごとに分類し、話者については「宮古語を流暢に話すことができるのはだいたい 60 歳代以上であり、それよりも下の世代になると宮古語を話せない方が増え、20-30 歳代では聞き取ることも難しくなる」（青井, 2018:88）という。林・ペラード(2012)らは、宮古語は南琉球語に属し、多良間島と宮古島内で話されている言語だが、「宮古語」とはいつでもコミュニティごとに異なる方言・バリエーションを持っているので 30 から 40 の宮古語の方言が存在すると述べている。

島という立地条件や歴史的変遷により、一つの「言語」から複数の変異が生み出される。それは地域や集落ごと、つまり地理ごとの静的な属性にカテゴリー化できよう。一方で、こうした言語を分け隔ててい

³ 出典元：Map-Miyako Islands Creative Commons, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Miyako_map.jpg

る地域のカテゴリーとは別に、島を巻き込む日本社会全体の変化、すわなち歴史・社会的な影響やグローバル化もが言語に影響を与え、特に言語に関わる個人の教育や選択に関わるだろう。このような複数の層の影響を見極めることで、さらなる話者に関わる文脈が明らかになるのではないか。

先述の明治時代の言語政策以後、「教育」を通して日本語が入り込んだことから、その政策が厳しく反映された教育を受けた世代、また戦時中の混乱期やアメリカの占領下の教育を受けた世代、つまり、話者一人ひとりが受けた教育にも、歴史・社会的な「言語」に対する態度や意識が反映されていたことは想像に難くない。このような影響のもと、家庭内での言語選択が宮古口から日本語に傾き、島人自ら、また宮古島の集落や島全体の中での日本語へのシフトが進み、宮古口の言語使用を複雑化させたといえる。

3. 消滅危機言語、宮古口の 에스ノグラフィー

調査開始時の研究目的は、宮古口の現状がどの程度の危機にあるのか、その言語使用を調べることであった。先行研究から想定していた宮古口母語話者は 60 歳代前後であったが、フィールドワークを始めて集落の人たちの語りと実際を見ているうちに集落によっては 80, 90 歳代まで進んでいることがわかり、調査から見えない集落を取り巻くグローバルな変化が陰影として言語話者にも影響を与えていることがわかった。また、小学 6 年生の時に会った子ども達の中学 3 年間で縦断的に追い、その間に親と祖母世代の方々と親交を深める中で、縦断的な視点が研究者の中にできてきた。

マクロとミクロとなるそれぞれ質の高い言語データをどのように得ることができ、また、三世代の時間的変遷をどのように捉えるのがいいのかなど、言語学と社会言語学の狭間を試行錯誤もしてきた。本発表ではフィールドワークで得た個人を取り巻く文脈（マクロ）とインタビューの談話（ミクロ）を組み合わせた言語のエスノグラフィー(Linguistic Ethnography)の可能性にも言及したい。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 24520586, 15K02659, 18K00695 の助成を受けた。

参考文献

- 青井隼人(2013). 「宮古語」概説 沖縄大学地域研究所(編) 琉球諸語の復興 芙蓉書房 pp. 87-98.
- 新垣友子(2013). 琉球における言語研究と課題 沖縄大学地域研究所(編) 琉球諸語の復興 芙蓉書房 pp. 3-29.
- 藤田ラウンド幸世(2015). 学校教育の中で言語継承への気づきを育てる -沖縄県宮古島市での自尊感情につなげる教育実践 教育研究 57 国際基督大学教育研究所 pp. 175-182.
- Fujita-Round, S. & Maher, J. (2017). Language Policy and Education in Japan. In T. McCarty & S. May eds. *Encyclopedia of Language and Education, 3rd edition, Vol. 1, Language Policy and Political Issues in Education*. NY: Springer pp. 491-505.
- Maher, J. C. (2017). *Multilingualism*. Oxford: Oxford University Press.
- 松原信勝 (2001). 野崎邑 歴史と暮らし みえばし印刷出版部
- ペラール,トマ・林由華(2012). 宮古諸方言の音韻 木部暢子(編) 消滅危機言語の調査・保存のための総合的研究 国立国語研究所 pp. 13- 51.
- Shimoji, M. (2010). An introduction. Shimoji, M & Pellard, T. eds. An introduction to Ryukyuan languages. *Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA)* pp. 1-13.